

高校生における進学意識と進路決定自己効力感および 職業未決定との関連

鹿 内 啓 子

高校生における進学意識と進路決定自己効力感および 職業未決定との関連

鹿内 啓子

Keiko SHIKANAI

目次

I 問題 II 方法 III 結果

1. 進学理由尺度と進学先決定要因尺度の因子構造
2. 相談相手への相談の有無による進学理由および進学先決定要因の比較
3. 進路決定自己効力感と進学理由および進学先決定要因との関連
4. 職業未決定と進学理由および進学先決定要因との関連
5. 進学先決定に影響する要因

IV 考察

1. 進路相談と進路意識との関連
2. 進路決定自己効力感と進学理由との関連
3. 進路決定自己効力感と進学先決定要因との関連
4. 職業未決定と進学理由および進学先決定要因との関連
5. 進学先決定に影響する要因

I 問題

高等教育がエリートの養成を目的としたものではなく、ようになってから久しいが、高等教育機関への進学率が50%を越えている今は、大学卒業資格をもっていけば就職に有利であるという状況ではなく、むしろ大卒でなければ就職に不利であるという状況にある。加えて、少子化により定員割れの大学・学部が増え、高学力の生徒が目指す一部の大学を除いて多様な学生が入学するようになった。入試制度も多様化したため、学力試験を受けずに入

[Abstract]

The Relationship between Attitudes toward Entering University and Career Decision-Making Self-Efficacy or Career Indecision in High School Students

This study investigates how attitudes toward entering university relate to career decision-making self-efficacy and career indecision in high school students. A questionnaire with a scale of reasons for entering university, a career decision-making self-efficacy scale and a career indecision scale was administered to 186 senior students in a high school. Students with high self-efficacy have high motivation for new experiences in a university and learning in a special field. Students with a high score on the career indecision scale have external reasons and a tendency toward immaturity. A difference based on sex is also found. In male students, high self-efficacy relates to low external reasons. On the other hand, female students with high self-efficacy have a tendency to decide on entering university based on their parents' expectations and their own wish to extend their field of activity and friendship. Since female students with high self-efficacy tend to be competent and active, they are motivated to have various experiences and their parents' expectations for their daughters to enter university.

学する学生も増えている。学生の多様化は学力の面だけでなく、進学の理由でも生じている。従来の大学教育で目指されていた専門知識や技能の習得、広く深い教養や知性の育成、ものの見方や思考力など知的な側面を目的にする以外に、サークル活動やアルバイトなどの体験を目的にしたり、友人関係の広がりを楽しみにする学生もいる。またとりあえず進学するという消極的なモラトリアム状態で入学する者もいるだろう。

進学理由に関する研究は多い。測上(1984a)は、高校生の進学志望動機として、

キーワード：大学進学への態度、進路決定自己効力、職業未決定、高校生

Key words：Attitude toward Entering University, Career Decision-Making Self-Efficacy, Career Indecision, High School Students

「大学の本来の機能」, 「家族への配慮と規範機能」, 「モラトリアム機能」, 「大学の副次的機能」, そして「大学の経済価値機能」の 5 因子を見出している。また八木・齊藤・牟田 (2000) と栗山・上市・齊藤・楠見 (2001) は, 高校生の進学動機についてほぼ共通の項目を用い, 「社会的地位」, 「得意分野」, 「無目的・漠然」, 「資格・専門」, および「エンジョイ」の 5 因子を見出している。松島・尾崎 (2006) は, 栗山・上市・齊藤・楠見 (2001) の項目を用いて, 高校生ではなく, 入学直後の大学生に進学理由を尋ね, 「専門・知的的好奇心」, 「社会的地位」, および「無目的」の 3 因子を得ている。三保・清水 (2011) は, 大学進学理由尺度を大学 1 年生 5 月に実施し, 「勉学志向」, 「正課外重視」, 「受験ランク」, そして「周囲の評価」の 4 因子を見出している。

進学理由あるいは進学動機は入学後の大学生活への構えと関連があることが明らかにされている。松島・尾崎 (2006) は, 学習意欲は知的的好奇心型, 社会的地位型, 無目的型の順に低くなること, 知的的好奇心型と社会的地位型は無目的型より学業重視の大学生活を志向し, 授業の選択においても授業内容の良さを考慮することを示した。また三保・清水 (2011) は, 大学進学理由の「勉学志向」が高い者ほど大学での学習を, 主体的に追及するものであり自分の将来につながる自己成長のためのものだと捉えていることを明らかにした。このように進学理由は入学後の適応や学習と深い関連をもつものである。

三保・清水 (2011) で得られた大学進学理由の 4 因子のうち, 「受験ランク」と「周囲の評価」は進学自体の理由というよりも, 進学先の大学を選択する理由である。測上 (1984b) は大学進学志望動機とは別に, 特定大学選択動機を測定し, 「志望大学の内容の充実」, 「志望大学の経済的・地理的要因」, 「自己実現への適合」, および「入学の可能性」の 4 因子を見出している。

また測上 (1984a, 1984b) は, 大学進学動機が誰からの影響を受けて形成されたのかということと, 進学志望動機および特定大学選択動機との関連を検討した。それによると, 教師からの影響を認知している生徒は, 大学の本来の機能と自己実現への適合の動機をもつ場合が多く, 父親を影響源とする生徒では大学の経済価値機能の動機をもつ場合が多かった。また母親からの影響は家族への配慮と規範機能および経済的・地理的要因と関連していた。これらの結果は, 教師, 父親, 母親それぞれの役割に応じた影響が生徒の進学意識に及んだ結果であると解釈された。

本研究では高校生の進学理由と進学先を決定する際に考慮する要因 (進学先決定要因) を取り上げ, これらが進路決定自己効力および職業未決定とどのように関連するののかについて検討する。また測上 (1984a, 1984b) で人的影響源と進学動機との関連が見出されたことから, 本研究では, 教員, 父親, 友だちそれぞれへの進路相談と進学理由および進学先決定要因との関連を検討する。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

札幌市内の H 高校の 3 年生全員を対象とした。回答者は, 男子 113 名, 女子 73 名, 合計 186 名であった。このうち, 分析の対象としたのは, 2014 年 6 月と 12 月の 2 回に回答している 4 年制大学, 短大, 専門学校に進学決定または進学予定の生徒で, 回答に不備がないものである。男子 90 名, 女子 60 名, 合計 150 名であった。なお, 就職予定の生徒は 6 名であった。

2. 調査内容

(1) 進路についての相談状況

進路を決めるために誰かに相談しているかどうかを回答させた後, 相談している場合は,

相談相手を10名の中から5名まで選ばせた。用意した選択肢は、高校の先生、小中学校の先生、塾の先生や家庭教師、父親、母親、きょうだい、友だち、先輩、親戚の人、その他である。また相談していない場合は、相談しなかったわけについて7つの選択肢から該当するものをすべて選ばせた。

(2) 進学理由尺度

進学を希望する理由について、測上(1984a)、古澤・山下(1993)、斉藤(1996)、八木・齋藤・牟田(2000)、栗山・上市・齋藤・楠見(2001)、五十嵐・佐藤(2011)を参考にして、17項目作成し、各項目について自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。項目内容は、結果における進学理由尺度の因子構造の項で示した通りである。

(3) 進学先決定要因尺度

特定の大学、短大、または専門学校を進学先または受験先に決めた理由について、測上(1984b)を参考に15項目を用意し、各項目について自分が当てはまる程度を5段階で評定させた。項目内容は、結果における進学先決定要因尺度の因子構造の項で示した通りである。

(4) 進学先決定影響要因

進学先を決める際に影響すると思われる6つの要因について、影響が大きかったものには◎、ある程度影響したものには○、影響しなかったものには×をつけさせた。6項目は、先生からの情報やアドバイス、インターネットや受験雑誌などからの情報、親からの情報やアドバイス、学校案内や入試案内など進学先の学校のパンフレット、オープンキャンパスへの参加、進学先の学校に行っている先輩からの情報やアドバイス、である。

(5) 進路決定自己効力感尺度

富永(2006)の「進路選択自己効力感尺度」を参考にして作成した12項目について5段階評定をさせた。調査を実施した12月ではすでに進路が決定していたので、進学先に在

学中の自分を想定して自分に当てはまる程度を回答させた。

6月に同じ高校で得たデータを使って因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ(鹿内, 2015a)、2因子が抽出された。第1因子は、自分に適した職業を決めることや見通しをもってやるべきことの計画を立てて実行することに対する自信を表わす「計画・決定効力」である。第2因子は、先生や親など身近な人に進路を相談することや進学や就職の情報を集めることに対する自信を表わす「相談・情報効力」である。

(6) 職業未決定尺度

下山(1986)の「職業未決定尺度」から選択した31項目について、女子高校生のデータで因子分析した結果(鹿内, 2004)を参考にして15項目を選び、今の自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。

6月のデータについて主因子法(プロマックス回転)による因子分析を行った結果(鹿内, 2015a)、3因子構造をもつと判断された。第1因子は、将来の職業をまだ決められていない状態を表わす項目が含まれるため、「未決定」因子と名付けた。第2因子は、働いている自分をイメージできないことや職業決定に対する不安を表わす「未熟・不安」因子である。第3因子は、職業について考えることに対する意欲の低さと採用してくれるならどんな職業でもよいという安易な構えを示しており、「安直・回避」尺度と名付けた。

3. 調査手続き

高校に依頼し、授業時間の一部を使って、授業担当教員に実施していただいた。実施時間は約15分であった。なお縦断的研究の一貫としてなされた調査であるため、記名をお願いしたが、その際には記名の必要性和プライバシーの保護について理解を求めると同時に、回答済みの調査用紙は自分で封筒に入れ、封をして提出させた。

4. 調査時期 2014年12月

Ⅲ 結果

以下で扱う下位尺度得点はすべて、各下位尺度に含まれる項目の評定値の合計を項目数で割った値である。得点が高いほど、下位尺度名で表される傾向が強いことを示す。

1. 進学理由尺度と進学先決定要因尺度の因子構造

(1) 進学理由尺度の因子構造

17項目について因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行ったところ, 以下の5因子構造が妥当であると判断された。

①周囲・猶子因子:「小さいころから進学することが当たり前だった」,「周りの人たちが進学するから何となく」,「自由な時間を楽しみたい」,「まだ社会に出たくない」,「親が進学を望んだ」という5項目から構成され, 周りの影響や社会に出ないで自由を楽しみたいという消極的なモラトリウムを示している。

②体験・勉学因子:「学生にしかできない体験や活動をしたい」,「広い教養や視野を身につける」,「興味ある分野の学問研究がしたい」,「自分の生き方ややりたい仕事を見つけるため」という, 積極的な活動や大学ならではの勉学のために進学することを示す4項目からなる。

③模索:「やりたい仕事になかったのでとりあえず進学する」,「将来の仕事に必要な資格や専門技術を取得する」(逆転項目),「興味ある分野の専門知識や技能を身につける」(逆転項目)という3項目が含まれ, 目標がないままでの進学を表している。

④学歴・収入:「社会に出たときに高い収入や地位を得る」,「就職に有利な学歴を得る」,「高卒ではカッコウが悪い」という3項目から構成され, 将来の有利な職業生活を手

に入れるための手段としての進学を示す。

⑤サークル・友人:「部活動やサークル活動をしたい」,「新しい友人や知り合いを作る」という2項目からなり, 活動や対人関係の拡がりを求める因子である。

(2) 進学先決定要因尺度の因子構造

15項目について因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行ったところ, 以下の4因子構造が妥当であると判断された。

①学校要因:「世間の評判が高く信用できる」,「高校の先輩から話を聞いて」,「利用したい入試制度があった」,「校風が自分に合っている」,「高校の先生にすすめられた」という5項目が含まれ, その学校がもつさまざまな特性による決定を表す。

②専門分野:「特別な理由はなく, 何となく決めた」(逆転項目),「やりたい仕事に必要な資格が取れる」,「興味のある専門分野が学べる」という, 専門分野の勉学を目的とした決定を表す3項目からなる。

③現実的要因:「通学に便利」,「親や親戚に勧められた」,「授業料などが家庭の経済状況に合っている」という3項目からなり, 学校の教育内容ではなく, 通学の利便性や授業料の高さなど現実的な要因による決定を示す。

④就職実績:「その卒業生の就職の実績がよい」という1項目だけからなる。1項目だけであるが, はっきりした因子となっており, また進学先を選ぶ際の重要な要因と思われることから, 1つの因子として扱う。

2. 相談相手への相談の有無による進学理由および進学先決定要因の比較

進路について誰かに相談することが進学理由および進学先決定要因と関連を持つのかどうか, また相談相手によってこの関連性が異なるのかどうかを検討する。ここでは主な相談相手である高校教員, 父親, および友だちを扱う。母親については相談していない生徒

がわずかしかないため、分析から除いた。

教員、父親、および友だちのそれぞれについて、相談している生徒と相談していない生徒の間の進学理由および進学先決定要因の各下位尺度の平均値に差があるかどうかを独立したサンプルの t 検定によって検討した。その結果、教員については、相談している生徒 ($M=3.86, SD=0.70$) は相談していない ($M=3.43, SD=0.87$) 生徒より進学理由尺度の「体験・勉学」が有意に高い ($t [148] = 2.95, p < .01$)。また相談している生徒 ($M=3.04, SD=0.75$) は相談していない生徒 ($M=2.70, SD=0.75$) より進学先決定要因尺度の「学校要因」が有意に高かった ($t [148] = 2.22, p < .05$)。父親については進学理由尺度の「体験・勉学」だけで有意差が見られ ($t [148] = 2.67, p < .01$)、相談している生徒 ($M=3.92, SD=0.67$) は相談していない生徒 ($M=3.60, SD=0.82$) より高かった。友だちについても進学理由尺度の「体験・勉学」だけで、相談していない生徒 ($M=3.60, SD=0.76$) より相談している生徒 ($M=3.97, SD=0.70$) が有意に高かった ($t [148] = 3.02, p < .01$)。

3. 進路決定自己効力感と進学理由および進学先決定要因との関連

進路決定に必要な事柄を遂行する自信である進路決定自己効力感は進学理由や進学先決定要因と関連すると考えられる。そこで、進路決定自己効力感の「計画・決定効力」と「相談・情報効力」のそれぞれの得点について、男女ごとに人数がほぼ同数になるように高群と低群に分け、進学理由尺度の5つの下位尺度得点と進学先決定要因尺度の4つの下位尺度得点をそれぞれ従属変数として、性別×高群・低群の2×2の分散分析を行った。進学理由および進学先決定要因の各下位尺度得点について、性別×高群・低群の4条件の平均値を示したものが図1-1～図1-2である。

図1-1の「計画・決定効力」について進学理由をみると、「周囲・猶予」($F [1, 143] = 12.50, p < .01$) と「サークル・友人」($F [1, 143] = 8.25, p < .01$) で性別×高群・低群の交互作用だけが有意であった。「周囲・猶予」については、単純主効果の検定の結果、男子では高群より低群で高い得点である ($p < .05$) が、女子では低群より高群で得点が高い ($p < .05$)。「サークル・友人」については、男子では高群と低群の差はないが、女子では高群が低群より高い ($p < .01$)。「計画・決定効力」高低の主効果は「体験・勉学」で有意であり ($F [1, 143] = 6.38, p < .05$)、高群が低群より高得点である。「模索」でも主効果が有意であったが ($F [1, 143] = 11.39, p < .01$)、ここでは高群より低群で得点が高かった。性別の主効果は「模索」だけで有意であり ($F [1, 143] = 7.63, p < .01$)、女子より男子で高い。「学歴・収入」ではどの効果も有意ではなかった。

進学先決定要因については、「専門分野」の高低群の主効果が有意であった ($F [1, 143] = 10.08, p < .01$)。「計画効力」の低群より高群で得点が高い。また性別の主効果が有意であり ($F [1, 143] = 4.77, p < .05$)、男子より女子で得点が高い。「学校要因」、「現実的要因」、「就職実績」ではどの効果も有意ではない。

次に図1-2で「相談・情報効力」について進学理由の結果をみると、「体験・勉学」で高低群の主効果が有意であった ($F [1, 143] = 12.30, p < .01$)。図1-2に示されたように、低群より高群で「体験・勉学」得点が高い。性別の主効果もみられ ($F [1, 143] = 4.12, p < .05$)、男子より女子で得点が高い。また「模索」でも高群・低群の主効果が有意となったが ($F [1, 143] = 15.77, p < .001$)、ここでは高群より低群の得点が高い。「周囲・猶予」、「学歴・収入」、「サークル・友人」ではどの効果も有意ではない。

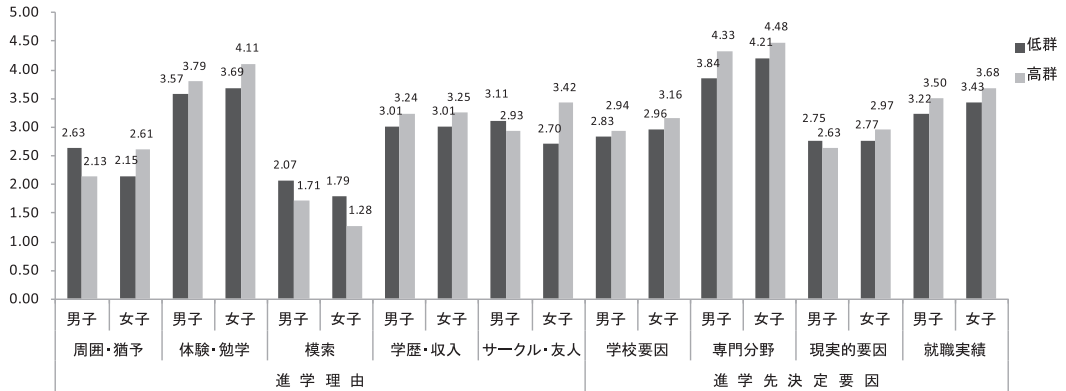


図 1-1 計画効力の低群と高群の進学理由下位尺度および進学先決定要因下位尺度の平均値

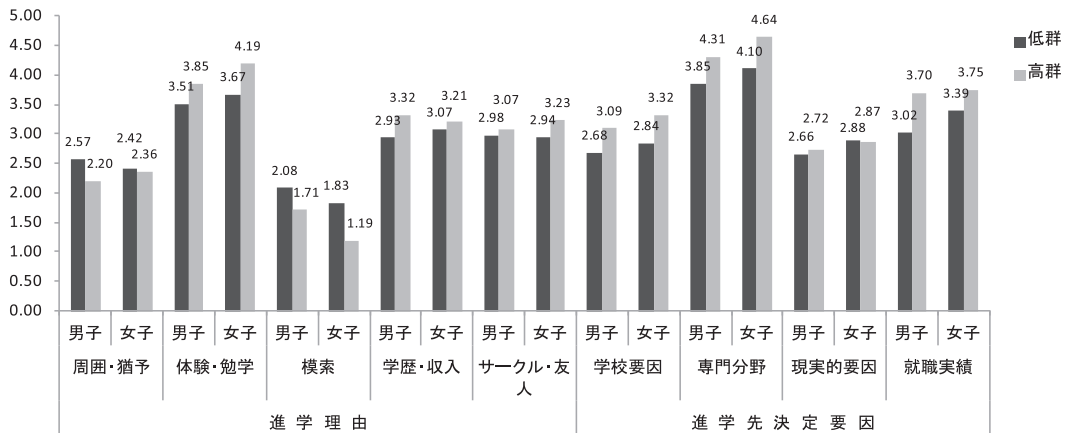


図 1-2 相談効力の低群と高群の進学理由下位尺度および進学先決定要因下位尺度の平均値

進学先決定要因については、高低群の主効果が「学校要因」($F [1, 143] = 13.36, p < .001$), 「専門分野」($F [1, 143] = 18.16, p < .001$), 「就職実績」($F [1, 143] = 6.33, p < .05$) で有意であった。いずれも低群より高群で得点が高い。また「専門分野」では性別の主効果も有意であり ($F [1, 143] = 6.01, p < .05$), 女子の方が高い。

4. 職業未決定と進学理由および進学先決定要因との関連

職業未決定尺度は将来の職業や職業に就くことに対してどのような態度をもっているかを測るものであるため、進学に対する態度と関連すると思われる。そこで、職業未決定の

「未決定」, 「未熟・不安」, 「安直・回避」の各下位尺度得点について、男女ごとに人数がほぼ等しくなるように低群と高群に2分し、性別×高低群の2×2の分散分析を、進学理由尺度の5つの下位尺度、および進学先決定要因尺度の4つの下位尺度について行った。進学理由および進学先決定要因の下位尺度得点の平均値を条件ごとに示したものが、図2-1～図2-3である。

「未決定」について進学理由の結果をみると、「周囲・猶予」($F [1, 143] = 10.34, p < .01$), 「体験・勉学」($F [1, 143] = 6.06, p < .05$), 「模索」($F [1, 143] = 40.78, p < .001$) で高低群の主効果が有意であり、未決定の高群は低群より、「周囲・猶予」が高く、「体

高校生における進学意識と進路決定自己効力感および職業未決定との関連

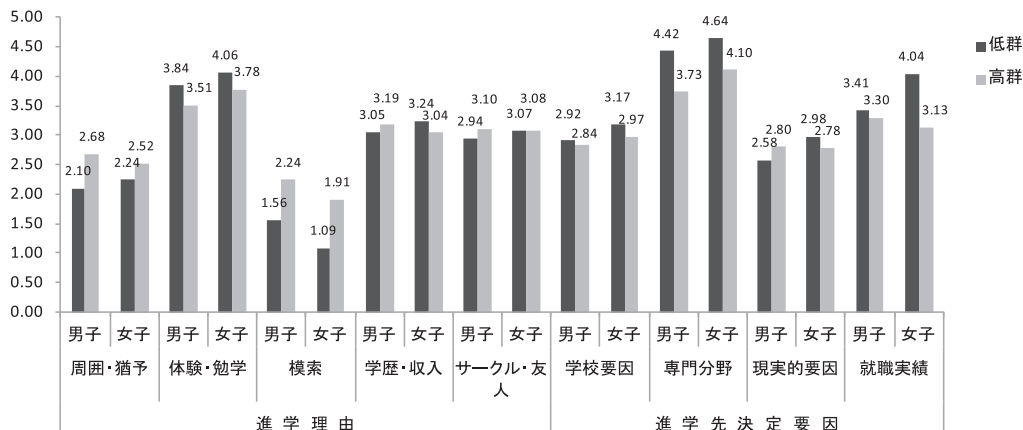


図2-1 未決定の低群と高群の進学理由下位尺度および進学先決定要因下位尺度の平均値

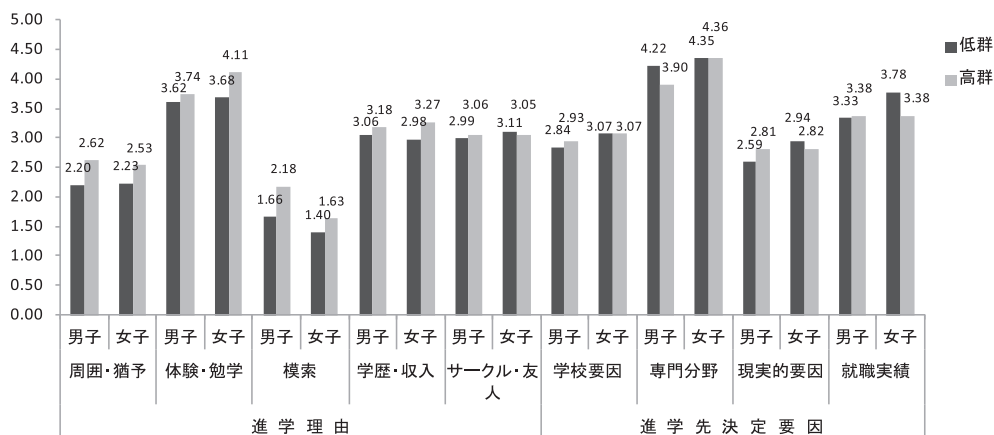


図2-2 未熟・不安の低群と高群の進学理由下位尺度および進学先決定要因下位尺度の平均値

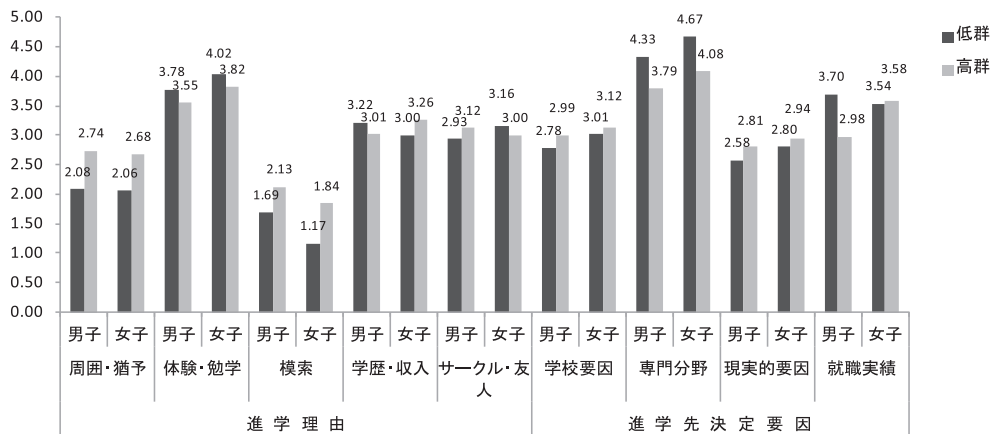


図2-3 安直・回避の低群と高群の進学理由下位尺度および進学先決定要因下位尺度の平均値

験・勉強」が低く、また「模索」が有意に高い。また性別の主効果が「体験・勉強」($F [1, 143] = 3.90, p < .05$)と「模索」($F [1, 143] = 11.40, p < .01$)で有意であり、男子より女子で「体験・勉強」が高く、「模索」が低い。「学歴・収入」と「サークル・友人」ではどの効果も有意でなかった。進学先決定要因については、「専門分野」($F [1, 143] = 29.51, p < .001$)と「就職実績」($F [1, 143] = 6.13, p < .05$)で高低群の主効果が有意であり、いずれも高群より低群の得点が高い。「専門分野」では性別の主効果も有意であり ($F [1, 143] = 6.77, p < .01$)、女子の得点がより高い。「学校要因」、「現実的要因」では有意な効果は見られなかった。

「未熟・不安」については、進学理由の「周囲・猶予」($F [1, 143] = 6.84, p < .01$)、「体験・勉強」($F [1, 143] = 4.86, p < .05$)、「模索」($F [1, 143] = 8.57, p < .01$)で高低群の主効果が有意であり、いずれについても低群より高群の得点が高い。「模索」では性別の主効果も有意であり ($F [1, 143] = 10.11, p < .01$)、女子より男子で得点が高い。「学歴・収入」および「サークル・友人」ではどの効果も有意でなかった。進学先決定要因では、「専門分野」で性別の主効果が有意 ($F [1, 143] = 5.65, p < .05$)となった他は、どの下位尺度についてもまたどの効果についても有意ではなかった。

「安直・回避」に関しては、進学理由の「周囲・猶予」($F [1, 143] = 24.27, p < .001$)と「模索」($F [1, 143] = 19.53, p < .001$)で高低群の主効果が有意であった。いずれも低群より高群で得点が高い。「体験・勉強」では性別の主効果が有意であり ($F [1, 143] = 3.90, p < .05$)、男子より女子の得点が高い。ここでも「学歴・収入」と「サークル・友人」ではどの効果も有意ではなかった。進学先決定要因については、「専門分野」での高低群の主効果だけが有意であり ($F [1, 143] = 23.88, p < .001$)、

高群より低群の得点が高い。他の下位尺度ではどの効果も有意ではなかった。

5. 進学先決定に影響する要因

いくつかの可能な進学先の中から希望するところを決定する際にどのような要因の影響が強いのかを検討する。6 要因それぞれについて、影響した程度を「影響しなかった」、「ある程度影響した」、「影響が大きかった」の3つの選択肢で判断させたが、表1は各選択肢の選択率を男女別に示したものである。

表 1. 進学先決定の影響要因の選択率

		影響なし	ある程度影響	影響大	
1. 先生からの情報やアドバイス					
男子		34.1	53.4	12.5	$\chi^2 (2) = 0.80$
女子		28.8	54.2	16.9	
2. インターネットや受験雑誌からの情報					
男子		44.3	51.1	4.5	$\chi^2 (2) = 3.09$
女子		50.8	39.0	10.2	
3. 親からの情報やアドバイス					
男子		46.6	43.2	10.2	$\chi^2 (2) = 5.33$
女子		28.8	52.5	18.6	
4. 学校・入試案内など、進学先の学校のパンフレット					
男子		35.2	52.3	12.5	$\chi^2 (2) = 3.68$
女子		22.0	67.8	10.2	
5. オープンキャンパスへの参加					
男子		25.0	52.3	22.7	$\chi^2 (2) = 7.06^*$
女子		8.5	57.6	33.9	
6. 進学先の学校の先輩からの情報やアドバイス					
男子		62.5	29.5	8.0	$\chi^2 (2) = 3.27$
女子		49.2	44.1	6.8	

男子n=88, 女子n=59 数値は% * : $p < .05$

男女とももっとも影響している要因はオープンキャンパスへの参加である。またこの要因は性別による分布の違いが有意であり、男子より女子で影響の程度の認知が高い。次いで影響すると認知されている要因は、先生や親からの情報やアドバイスである。インターネットや受験雑誌などからの情報は影響度の認知が弱い。

IV 考察

1. 進路相談と進路意識との関連

教員、父親および友だちへの相談と大学の本来の機能である「体験・勉学」を進学理由とすることが関連していた。本研究では進路を相談している相手を最大5名まで選ばせているのに対し、測上(1984a, 1984b)では進学動機が形成されるまでに主に影響を受けた人を1人選ばせている。したがって、測上(1984a, 1984b)では影響源の役割に応じた影響を受けた結果、生徒の進学意識が形成されたと考えられる。一方本研究では各相手に相談しているかどうかを尋ねており、相談の内容や相談から影響を受けた程度は不明である。しかし教員、父親、友だちに相談することが「体験・勉学」という大学の本来の機能を求めることと関連していた。進学意欲の高い生徒は積極的に周りの人々に相談するであろうし、相談することで新しい情報や励ましが与えられれば、それが進学意欲を高めるといふ循環が考えられる。周りの人に相談することの重要性を示す結果である。

また本研究では教師に相談している生徒は相談していない生徒より「学校要因」によって進学先を決定する傾向が強かった。教師は進路指導の専門家として個々の大学や専門学校についての情報を多くもっているだろう。教師に相談する生徒はそこから得られる特定の大学の情報によって進路先を決定することは肯ける結果である。

2. 進路決定自己効力感と進学理由との関連

「計画・決定効力」と「相談・情報効力」のいずれについても、これらの高群が低群より有意に進学理由の「体験・勉学」の得点が高く、逆に「模索」では低群のほうが有意に高かった。今回の進路決定自己効力感尺度では、進学先の学校に在学中の自分を想定して進路や職業を決定していく上で必要なことを

うまくやれる程度を評定させた。したがって大学本来の活動や勉学という明確な目的をもって進学することは、進学後もその目的の達成のために行動できるという自己効力感と関連するであろう。

「模索」は、専門分野の知識や技能を修得することややりたい仕事に必要な資格や技能を取得することを目指す、やりたい仕事がないのでとりあえず進学するという状態を意味している。このような傾向が高ければ、進学後も将来の職業に必要なことを自ら進めていく自信はもてないであろう。

「周囲・猶予」と「サークル・友人」については、「計画・決定効力」の高低群と性別との交互作用が有意となった。男子では効力の高い群が低い群より「周囲・猶予」得点が高いが、女子では逆に効力の高い群のほうが「周囲・猶予」得点が高い。また男子では効力の高群と低群の間に「サークル・友人」得点の差はないが、女子では効力の高い群のほうが「サークル・友人」得点が高い。「体験・勉学」および「模索」で進路決定自己効力感の主効果が得られ、効力感の高い群のほうが、大学の本来の機能である「体験・勉学」得点が高く、目的なくとりあえず進学する「模索」得点が高いことを考えれば、交互作用の男子の結果はこれと整合するものである。他方女子の結果はこれと相反するように見える。女子では、効力感の高い生徒が、周囲の状況の影響や消極的なモラトリアムを示す「周囲・猶予」や大学の副次的機能である「サークル・友人」の得点が高いという結果はどのように解釈できるだろうか。

「周囲・猶予」を構成する項目ごとに、性別×「計画・決定効力」高低群の2×2の分散分析を行ったところ、交互作用が有意だったのは、「自由な時間を楽しみたいから」、「親が進学を望んだから」であった。また「小さいころから進学することが当たり前だったから」と「周りの人たちが進学するからなんと

なく」は有意な傾向であった。単純主効果の検定の結果、「自由な時間を楽しみたいから」については、男子では高群より低群の得点が高いが、女子では逆に低群より高群の得点が高い傾向にある。「親が進学を望んだから」については、男子では高群より低群の得点が高いが、女子では逆に低群より高群の得点が高い。「周りの人たちが進学するからなんとなく」については、女子では高低群の差はないが、男子では高群より低群の得点が高い。

同様に「サークル・友人」を構成する 2 項目についても性別×「計画・決定効力」高低群の 2×2 の分散分析を行ったところ、「部活動やサークル活動をしたいため」では交互作用が有意でなかったが、「新しい友人や知り合いを作るため」では交互作用が有意であった。単純主効果の検定の結果、男子では効力の高低群に有意差はないが、女子では高群の得点が低群より有意に高かった。

「周囲・猶予」と「サークル・友人」の項目のうち女子で効力の高群が低群より得点が高かったのは、「自由な時間を楽しみたいから」、「親が進学を望んだから」、および「新しい友人や知り合いを作るため」の 3 項目であった。女子の大学進学率が高くなっているとはいえ、親が進学を望むのは女子より男子に対して強いであろう。そうであれば、親が進学を望む女子は、期待されるだけの能力や特性をもっていると考えられ、本人の自己評価も高いと思われる。また男子より女子で対人関係が重要であり、対人関係の良好さと自尊感情との関連が高いと考えられる。従って計画・決定効力の高い女子は自立的で自尊感情が高く、対人関係にも積極的であるので、大学での対人関係の拡がりや自由な時間を使つての大学生ならではの活動や経験を望んでいると言えよう。進学理由の「体験・勉学」因子を構成する「学生にしかできないいろいろな体験や活動をしたいため」において、男子では計画・決定効力の高群と低群の間に有

意差がないが、女子では低群より高群が有意に高いことは、これを裏付ける結果である。女子においては、「親が進学を望んだから」は他律的な進学理由ではなく、むしろ逆に、能力が高く、親の期待も本人の自己評価も高いことを表していると考えられる。

3. 進路決定自己効力感と進学先決定要因との関連

進路先決定要因の「専門分野」については、「計画・決定効力」と「相談・情報効力」の高低群の主効果が有意であり、これら効力の高い群が低い群より「専門分野」を決定要因とする傾向が強かった。進学理由の「体験・勉学」でも同様の結果が得られたことと整合する結果であり、自分の興味のあることがすべて必要な資格が取得できる進学先を選ぶことは、進学後の目標が明確に定まっていることであり、その目的の実現に向けて必要なことを考え実行していく自信も高いであろう。

「相談・情報効力」については、「学校要因」と「就職実績」でも高低群の主効果が得られた。相談の有無と進学先決定要因との関連について、教員に相談している生徒は相談していない生徒より「学校要因」を考慮していることを考え合わせると、必要な相談をしたり有用な情報を得ることの自信がある生徒は、先輩や教員から得た学校についてのさまざまな情報を利用すると考えられる。「就職実績」についても相談する中で就職についての情報を入手して進学先決定の 1 つの要因としていられると思われる。

4. 職業未決定と進学理由および進学先決定要因との関連

「未決定」、「未熟・不安」および「安直・回避」のいずれについても、「周囲・猶予」と「模索」で高低群の主効果が有意であり、低群より高群で「周囲・猶予」および「模索」が高かった。将来のやりたい仕事が見つかっておら

ず、職業について考えようとせず、職業人としての自己イメージも曖昧な状態であることは、進学を決めていても、明確な目的がなく周りに流されてとりあえず進学する傾向と結びつくのは肯ける結果である。

進学先決定要因の「専門分野」についても、これと整合する結果が得られた。「未決定」と「安直・回避」の高低群の主効果が「専門分野」について有意であり、高群より低群で「専門分野」を決定要因とする傾向が強いのである。将来の職業を定めそれと向き合おうとする生徒のほうが、専門分野の勉強や必要な資格の取得ができることを進学先に求めるのは当然である。

進学理由の「体験・勉学」では一見矛盾する結果が得られた。「体験・勉学」について、「未決定」の高低群と「未熟・不安」の高低群の主効果が共に有意であったが、「未決定」においてはこれの低群が高群より「体験・勉学」が高いが、「未熟・不安」においては高群が低群より高いのである。「未決定」で得られた結果は、将来のやりたいことを定めている生徒のほうがそれに向けての積極的な体験や勉学を目的に進学する傾向が強いという、もっともな結果である。では、「未熟・不安」の高いほうが「体験・勉学」得点が高いという結果はどのように解釈できるだろうか。「未熟・不安」の高さが何と関連しているかをみるために、男女別および「未熟・不安」の高群と低群別に、進路決定自己効力の3つの下位尺度得点、職業未決定の他の2つの下位尺度得点、進学理由の各下位尺度得点、および進学先決定要因の各下位尺度得点と「未熟・不安」得点との相関係数を算出した。その結果、男子の「未熟・不安」低群では、「未熟・不安」得点と進路決定自己効力の3つの下位尺度との間に負の有意な相関が、職業未決定の2つの下位尺度との間には正の有意な相関が得られ、また進学先決定要因の「専門分野」との間には負の有意な相関が得られた。

しかし男子の「未熟・不安」高群と女子については、進路決定自己効力と職業未決定のどの下位尺度でも「未熟・不安」との間に有意な相関は得られなかった。同様に「専門分野」との相関も有意でなかった。この結果は、「未熟・不安」が職業未成熟の状態と結びついているのは、男子の「未熟・不安」が低い場合だけであり、男子の「未熟・不安」の高い場合と女子では、「未熟・不安」が高いことは職業意識の未成熟を表していないことを示している。男子より女子で「未熟・不安」が高く、「安直・回避」が低い傾向にある（鹿内、2015b）こと、また本研究で「体験・勉学」および「専門分野」では、男子より女子の得点が高いことを考え合わせると、「未熟・不安」が高いことは真面目に将来のことを考えていることであり、それが大学の本来的な機能である勉学に対する動機の高さと結びつくのであろう。

5. 進学先決定に影響する要因

八木・齊藤・牟田（2000）は進路選択の際の情報の有用度について高校3年生を対象に検討した結果、有用度をもっとも高いものは、進学先の見学であり、次いで進学先の学校からの情報、受験雑誌からの情報、進学先の先輩からの情報が続いた。有用度が低かったのは家族からの情報、次いでインターネットからの情報であった。本研究では進学先の決定に影響する程度を尋ねたが、オープンキャンパスへの参加がもっとも大きな影響を与えていることは八木・齊藤・牟田（2000）と一致する結果である。八木・齊藤・牟田（2000）では家族からの情報の有用度をもっとも低かったが、本研究では親からの情報やアドバイスはある程度の影響力をもっていた。本研究の高校生に地元志向が比較強いこと、大学附属高校であり推薦制度を利用する生徒が多いことなど、様々な要因が生徒の利用する情報の影響の強さに関連していると

思われる。

〔謝辞〕

調査にご協力くださいましたH高等学校の先生方と生徒の皆様にご心から感謝申し上げます。

引用文献

- 測上克義 (1984a). 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.
- 測上克義 (1984b). 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232.
- 古澤照幸・山下利之 (1993). 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8, 98-106.
- 五十嵐敦・佐藤公文 (2011). 高校生の大学進学動機の類型化とキャリア発達との関連について 福島大学総合教育研究センター紀要, 10, 25-32.
- 栗山直子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見孝 (2001). 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究, 49, 409-416.
- 松島るみ・尾崎仁美 (2006). 大学進学動機による学習意欲・授業選択態度・重視活動の変化について 京都ノートルダム女子大学心理学部・大学院心理学研究科研究誌「プシュケー」, 5, 13-24.
- 三保紀裕・清水和秋 (2011). 大学進学理由と大学での学習観の測定—尺度の構成を中心として— キャリア教育研究, 29, 43-55.
- 齊藤浩一 (1996). 大学志望動機の高등학교間格差に関する実証的研究 進路指導研究：日本進路指導学会研究紀要, 17, 28-36.
- 鹿内啓子 (2004). 女子高校生の進路選択に関わる要因 北星学園大学文学部北星論集, 41, 13-28.
- 鹿内啓子 (2015a). 高校生における先生・親への進路相談と進路意識との関連 北星学園大学文学部北星論集, 52, 1-9.
- 鹿内啓子 (2015b). 高校生における親との関係と職業選択自己効力および職業未決定との関連 北星学園大学文学部北星論集, 62, 1-12.

- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 富永美佐子 (2006). 高校生のための進路選択自己効力尺度の作成—内容的妥当性・依存的妥当性の検討から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54, 355-375.
- 八木晶子・齊藤貴浩・牟田博光 (2000). 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 進路指導研究, 20, 1-8.